特 7
2
73

蓋浦詩

上

尾張伊藤
圭介之記

伊藤
篤太
郎記

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用

特7-73
伊藤大記
京都圖書館

介藩浦之錦小序

萋分斐分成是貝錦詩にもとうたい稚此國也ハ古今
にも玉やひ給ひん貝や秋ろいんと詠し事昔より
賞揚し事古ふり其風れまふ〳〵吹よ行る四方の海も
浪靜にして太平鼓腹乃児女の玩となりぬ浦れ稱我
拾集先て此事をもけ事まく海士れ子浦人ハ可し若き間
好事の人を誘て侶を正し古き文を書よりて若て
みたりに志る勢しその年を經て二巻中ハ有り然
介藩と号し事筒に納め置ぬ其ハ黄葉を傳て其金
と報し小児の時をやむ事勝にもなる事と此おりもいさ
我ちし然に志るし然

巳己姑洗吉辰

大枝流芳自序

貝盡浦之錦巻上

男爵伊藤圭介先生自筆
AUTOGRAPH OF
BARON KEISUKE ITO.

貝盡浦之錦 巻
寛延四年 大枝流芳著
介品ノ解説頗ル詳ナリ
其間ハ粗ナレ尾介出書
中最古クシテ参観スベシ

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用

凡例

○介ハ惣名なり其中異類多し此土ニ貝を以惣名とするハ誤也貝子ハ介の中の一物の名今云せからがいゝ安がいなど云るものゝ事也此貝ハ古へ寶として用ゐ諸の介れ出たり因て此ニ去ハ惣名ニ此字を用ゐるも也へなるにあらざ此書古ふ志さがひ惣名ニハ介の字を用ゐ

○本艸綱目四十又巻介虫の部にあるも其中二ツニ且ハ亀鱉と云蚌蛤と云亀鱉ハ此書ニ取所にあらざ蚌蛤の類を集綱目ニ集る處の蚌蛤二十九種にあるも委ふ種をのぞ

○桐貝經ハ貝子の種類を論ず其用かしといへども古来貝を論るものゝ古きものゝ也因て今ハ用ゐ金斗一冊此ニ添る

○先輩の介ハ言あるものゝ悉く取捨して

こゝに採用ゐ

○夫かいを弄るゝ古来ハ只蛤の大なるを二百六十を集め古きをかざるに中を絹を以て捻し金銀を点じ五彩の畫をほどこし六角の筒に納て古きを合を以て児女の翫とす未をろくの介を何ぞ用ゐる事をしらぬ元禄の始れ頃より大に此弄おこりて都鄙全く時行す賞鑒家古人の貝をよみを有ゐ古ふ城ゐ集て四条大納言公任の撰ひ給ふ三十六の歌仙の数に配してしたるに三十六歌仙介となしてこそてもやしぬ

ちゝ時おを集るゆゑ云ろうぞ不審ある人あるし因て其後
こ稱を考て新撰の歌仙介世に行るゆゑ後歌仙集序中に
見えたり其後れ千六介と称り也今按るに後に撰し方を
委し取用べし

○歌仙介の集撰者れ姓名をしるさず近年兒女の
をてあまぬ百人一首の書れ上層に合刻して世に行る又
偽写の誤多し余別に善本の写本あり

○綱目曰蚌與蛤同類而異形長者通曰蚌圓者通曰蛤故蚌從
手蛤從合皆象形也後世混稱蚌蛤者非也今此説にしたがひ
長を蚌とし圓を蛤とする所あがりて靡あるを螺と云

又蠃とも云又一片無對のものあり石決明の類也又異形の類也
今。蚌。蛤。螺。無對。異形。の五品をつのち記せ又一種貝れ類也
合て六品なり

○今又五十四種の源氏貝あるを是も其の帖数に配し名を命
ずるものゝ又演出産に百貝を小倉の山荘れ百首に配せよし見え
たり然ども古より何きの介を以五十四帖に配し百首の歌に配
せる定例なし又十四色百色を集く只其数にこれるのゝ歌仙
介れどく定まるゆゑ因て歌仙を以弄貝の長とあらしむ歌仙貝ハ
古歌ぬきにより好介も撰ひ何き介も歌ぬべ撰入る今余五十四
種撰て源氏の帖数に当る名目并中にしるし給る源氏介と

云るゆゑは後家仙の序中に入えたり

○介の衆類甚多し耳目の及ぶ所採摭をといへども委天下の物
直ぶべきにあらざる後の博雅の人を待のみ

○介の名實あらびたゞしきこれ類は本邦に於て天下古今通用の名に瑣碎
の介に至ては其名一槩ならざる多く雷同を又一物にて変化の原莫可名状
後の人強て名を命ぜんとて方言あり俗称あり雅名あり悉及ぶ所集といへ
是又直ぶべからざるものゝ漢名は云に不及和名にも正きものを本名と定
俗称異名混同して呼ものは其下に附ぶ釈名形状名産所出不出所分を記
○前後の家仙介二組は家并に圖あり此書附録して余別にあり
其ゆゑ只名目を載て雷同の評を挙ぬ

貝盡浦乃錦巻上

目録

諸説
和歌の浦真圖
歌仙貝遺漏百餘品
住吉浦潮干の圖
前歌仙貝三十六品評
但馬竹野浦真圖
後歌仙貝三十六品評

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

源氏介配當目録
新撰六歌仙介

貝盡浦之錦上

諸説

介ハ艶光あるて大ならぬこそ色分明に白きそのハ潔白に
赤それハ深紅に斑文あるものハ阿ざやのなるをよしとす蚪蛤乃
類お合さるそのハ両片お弟して不離なるをよしとす
又瑠璃の介甚小く小豆米粒のことくも見るによりて五両銭
十両銭れ大さも大にしてあしく只蠶豆の大されどくなるを
のなへまとす通しこそ陰生質大なる介阿里生得小なる介を
小なるハ大なるんを擺ひ大なるハ小なるを寝とす前紀等に
集てこそ形大やうそろふをよしとす甚得かたし

錦介ハ雅観の介の王なり諸方に有れども丹後但馬の
海より出るものよろしくハなし紀州にハたま〳〵ある
ものハ色うすし此介をなでしこ介と名付云を
なでしこと云べき介なれども是ハ別物なり
まくべ介好介ハ表多くよき岩多き海ハ小介ハまれなく
なし細砂のある紀海まゝ有摂津ハ海多くハなかるべく
内海なれバ好介なし
紀州和歌浦荒浜加太の粟嶋北浜等に至りて見よ
介多し泉州の海辺ハ好介なし但州竹野浦好介
多し丹後大敷浜琴引浜などよき介あるよし余ハ

至りて拾ひし人よりもらひしあり紀州熊野にても好介
あるよしもらひ見しなり五畿内等にハ稀し然介も
好介もあるべきなれども余も至らねど聞し人を拾ひ
来らざれバ志らず
相州鎌倉雪の下および江のしまれなかうらに小介
東家多くまんべく此地にはむうしようき
介あまりなりと
寛永正徳の頃紀州和歌浦に至りて文介年々至る所年
置けるバ拾多くの好介の名をおぼへしと遠ひしもの
多し近来ハ文華さかんにして世に多く介をとてやはる

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

より浦人多く集て商ふお歌仙よりて名を呼歌仙有
とるとものハ所にて付し名多くあと見へて雅ならば
但州に至れ時或人乃抱語に此日拾貝と云人あるまで
詰ふの海邊を行御して介を見ひて貌よし物語
聞しなり殆しも雅人なり此癖の膏肓に入し人
なるべし但州にも来るよし事しなり
海ハ朔日より十五日ハ置潮ゆるにより介ゑやもし
下十五日にハ我が見ゆるなきバ介拾かたし海ハ多く無
朝より日中ハの間がよし晩方ハ多く汐ゆるなり
三月三日にハ大潮乾るゆ本艸の車渠介の下にも見へ来り

日本も此日ハ世に知ることく大汐の乾る日なり此日別して介類
多くゑやもし
愼懋官が花木考に螺多種掩白而香者曰香螺殼尖長
者曰鑽螺味次之有刺曰刺螺其味辛曰辣螺有曰拳螺斂
螺斑螺丁螺云々ゑまにて螺の類出くみじかくなりあるどの
こうちよくしまり

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

歌仙介 遺漏名介 百餘品

鵲介

蚌類 鵲の羽のごとく地色青くかし褐色 宮ゝ之の斑文 鵲の生れどし薄きかいこ 和分にあるまれ 採花の海辺もあれども色悪し

栗牛花介 和分にその名

螺類 形黒しに似たるうすくち色あさがほのごとし 芸州平色もあれ遅りたる好介なり 和分より出ること稀なり

拳螺と云類なるを 本艸云青螺色如翡翠とあるハこれなるべしか

絞楓介 和分にその名

蚌類 地白く紅のまてしがりあざやかにあるを浅やありて きまいなり多くハ好ばし 和分より出る

月日介 嶺表録異記号海鏡

蛤類 うすく丸し片方赤く片方白し周て月日乃名目あるを大なるをの多くかきをの鮮し 和分にて賞れども 此浦にハ和し他所より来るよし

羽子介 和分にその名 百貝圖に公羽貝と云

蚌類 黒白にして薄し鳥のねれ形のごとし但州に多し 和分にをあり

海雲介 和分にその名

国立国会図書館 タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

蚌類 ちゝ形ある事はどし頭あり相あり尾の方を稱ゆがり
色白し法やなし先づらし貝なり和名より出ふ

葵介 百貝圖に海馬家と云

螺類 大なるとの多し小きとの志稀之小も蜑豆二粒
の大さ有り 和名にしたこふの雄介と云なり あふひ葉のとくまじ有るより
名とは色白くかうす黄の類薄くまれやまし
本艸云鸚鵡螺と云との是なるんか類も鳥に似ると云り

章擧 ふみ

螺類 色白し光かしうまし 和名にしたこふの雌介と云なり 面白介なり
かやうれ形なり是も鸚鵡螺の類也

駒が爪 和名浦の名

蛤類 色白く褐色の斑紋有りたてまはじぬかく入る
昔は和名の浦にて秋伝の中の蜑貝をこ馬が爪と云り今は志からぎ此貝を云也

鷲の爪 和名浦の名又法るのをしと云不も有り 百貝圖に勢ト云

異類 さきはな艸に有る龜蜘なり岩に付て有り俗称
志いと云大和な草にとゝえたり龜の手とも云なり
のはりまるをれなり加左に多し

めくはじや 三才圖會云江橈又号指甲螺

蚌類 長さ七八分斗たいらげに似たり色青黒く薄し
備前牛窓に多しかはは志稀なり

胡螺介 和分浦の名 百貝圖ニ云 玉貝ハ眞珠是ニアリ

蛤類 内あいびのごとくさえりかたくうすき白く黒き
斑点あるを形胡螺のごとし面白き介なり

蛍介 和分浦の名 百貝圖ニ所圖ノモノハ異之ニ

螺類 俗称がんがらと云ふものくちいさく内あいびのごとく
光あるを云かハ黒くあらし拳螺の類なり

延介 和分かしの名

螺類 むしろを織がごとく縦横に縫ひ筋あり地色
白く褐色の斑点あるを斑螺の類なり

山多介 和分かしの名

螺類 かし長てなり横に薄く筋あるを地白く山多の
ごとくなる色の斑紋あり斑螺の類なり

蘭

蛤類 あさりのごとく小介なり地白きやうにくむさきもの
うつまゝて浅やあり紫貝よりあつし

香箸介

異類 是ハ海栗のたりなり尺立にて和分かし名を命
ずると尺へたり中の内海鐙とて洽なり色黄なりかハ栗の
ごとくいがあるを是香箸介なりいがの下に又皮あり介れ
ごとし甲介と云ふものさまなり

海燕骨 百貝圖 総角 魚坐貝氏

異類 ちきはいかたこの類本艸原始に圖あり網目にものせたり大和本艸にとりけるは時はとみぢの葉にしたり肉去て殼をいらぐむいかれかうの類なりけるをしかでと云殼をきはやう介と呼表に如きやうの花色が如形刻せ像がごとし玉多きものゝ掃部に花清にと多し異物なり

紫介 和方にしの名 うら紫 蔵のくら茶 百貝圖ニ飯櫃貝ト云

蛤類 外黄黒く肉紫なり本艸云紫貝にあらず又一種中の唇に細さきざあり小児おもりぬきばさらばどくなる如し表に地白に紫の紋あるより紫介と云なり後方他に入れ紫介是なり変に云紫介は始に云紫介と又はうら紫と云

姫蘆 和方浦の名 百貝圖ニ姫貝ト云

蛤類 方仙の中に入れざ稚介はあるめあり横にはざまめはすじ高くあり此ひめはざれはすじ如くそばをやうにはじのごとくなるものあるて小介なり先りよくやさしれ介なり

甲介 うにつが うにのを 百貝圖ニ霊蠃子氏云

異類 かうばし介の下に弁ばるがごとし海栗の殼に白きまきあり甲は黒のだとれ黒あり異物なり大小数種あり

蘂介 和方浦の名

蛤類 かしもて如うもく色褐色なり小介之名似つかぬ介如り

筍介 和名の名 又そうし 百貝圖ニ簇貝尼

螺類 そけのこれどくさきそぐり出しいろハ褐色のさゝらあ
るがごとしたてまじあるもむかしハ和名浦にしらうしと云里
迎来たけのこ介と云そうしハ雑子に似るによりて名とす鑽螺の類也

松虫介 和名の名

螺類 色まつ虫ばどくたてまじあるも横にもすじあり
殻もあまくよれ介なり

牛の角介

異類 うしの角ばどしふとれ方のこぐちに口あり紀州
瀬戸より出る組花にも稀にあるも色白し又うまと褐色をも

異物なきどもいやしからぬ介なりたてまじあり

玉椿介 和名の名又白椿介とも云

蛤類 雪白白玉椿の葩一川落しばどく粧なる介也
丸くしてあり之へきり中薄し

糸の事介 和名の名 百貝圖にハ捻貝と云

螺類 色白くしてふくまじこ内へ入て糸を以て
内くがごとしせてまじ入よれ介なり和名浦に出る

酢介

靡也 さき螺類の介の靡なり黒きあり白くさきたる
あるも血に酸を入きなるてハ何し尚諸方にも多しを云

おしまは得がたしと云ふ本艸に云郎君子相思子是なり

き蜜ふる介

無對類 白き小介なり薄く殊だしのごとし片方かし是

総角介

異類 おさやう介の久しくされてくへおち下をうり殊ふ

しを云なり又ゆに花れごとく刻こなせるがごとし異物やし

曲介 大和本艸の名 和分かしはおや介と云 百貝圖ニ濱葛ト云

異類 本艸に所分石蛇なり間がるまく蛇のごとし多ハ

頭尾なし稀に尾の方あるもあり異物なるまごとも多くあり

又かくの黄なるもあり其のハ各白し少し黒き不あるもあ

くぢや介 和分浦の名

無對類 是ハよめれきかたし介の類なりくぢ家を蓄るなり

似たり色うすき白く又黒色もあるも面白きものく縦横に

まだしたりなり

舟介 和分浦の名 百貝圖ニハ松貝ヶ浦須貝ト云

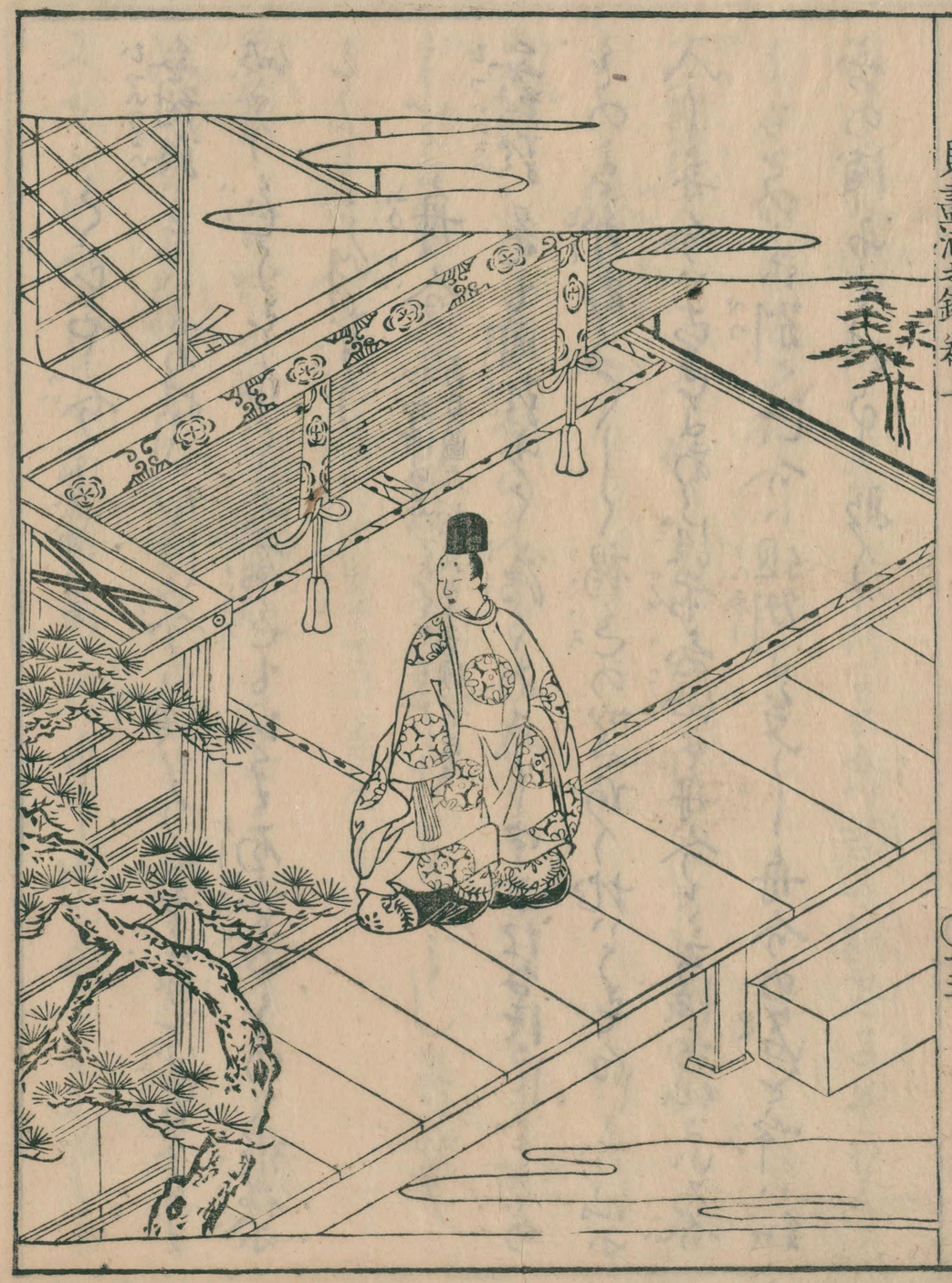
無對類 是も同類ゆく薄くあさし中に大なるほどごとくの

そのまゝ外あらくしく褐色のかたあり地ハうすき白し分仙に

入し舟介ハ古きまあらば前分仙に舟介と云後分仙にいろ介

と云そのとハ別之此介ハ但州に多し舟介の名を呼ハ和

分の浦にそれ事なり



国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用

蜻蛉介 和分浦の名

螺類 出てふく庭そのかしら尾同じ姫とさえ艶はし
地うしかきにし細き白き里なりかき介之外にはなし 以
和分の浦になり

巻手介 和分浦の名

螺類 出てなり巻るまじ高くまた鳥のぶとしさたそのる
色うしかき色なり

蒲萄介

貝類 貝子の小きうすれそのえ姫どうのあかく熟せし
ごとくまたぬく小介にて志ほうしたる介なり

貝子 たからかい 蚌貝とも云ふし 百貝の圖に見えたり

是ハ古へ寶として交易に用しそのなるを委ハ貝經
本艸に見えたり錢世に行きて貝子をとると天竺にも貝をも
まとり碁石にしてかりしやもぎと云ふ錢のやうに用ゆと
なるを色ハいろくなり東海夫人の類に婦人産するに
をたせバ安産すると云ふ固てこやまがいといへる物ども此説
本草にハなし此土の俗説なり諸方ともに多くなり

面分だるを 和分浦の名 百貝圖ニハヅベタ介を面分だると云ハ誤し 古名清きくに見へたり

螺類 色白く細くなさくまじ横に入出てある介なり
多くハ如し此名を雅ならば別り名をあらべきそのく

いましは甲香ハかる貝のやうなるがちいさくて口の極細長にて出る貝の事なり
武蔵国金沢と云浦にありしを所のものハ石かぶりとぞいひし

孔雀貝 異名也

蚌類 ちそう貝 からき貝の異名を和歌浦にていふなり
よりそろなるハ吐撥なる名なり

螺類 きさごみ貝

螺類 きさごは色いろいろしほきさやごとも云ふ小児糸に
遊びに伊勢より多く出る諸方にも多し独楽に
作る貝なり糸につなぎ数とするなり

車貝 和歌浦の名 百貝図に たとき貝と云

螺類 是もきさごの類にして色わる黄なり裏の中に穴あき

うつくしく見ゆるハ車のごとし因て此名を呼となへたり

蚌類 刀貝 和歌浦にての名
是を菓子に云馬刀なるべし馬刀をまてと和訓せるハ
非なりまてハ蟶なり此貝うすくしてみ白く鶏色乃斑
点ある貝なれど薄し是もまてがひの類なり

螺類 石疊貝 和歌浦の名 百貝図に蝶貝ト云
これ先にのせたる知らる貝の類にて大なり俗称がんがらと
云ふもの赤と黒との紋交りて石だたみのごとくなれどしきまに
よりて名とせる歟

釜貝 和歌浦の名

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

螺類　口大きはして釜のごとしかあらく横節阿里中貝如り
よれたるのにハ阿らば
狐介　二種有　百貝圖ニ丸キ方ヲ文殊貝ト云　又色黒クコキヲ油貝ト云
蛤類　二種阿里一種ハ其色狐いろなるより名とする歟
近江和方浦にし云狐介ハかし出てなる姫和介に出てに
節ふかく入色うすかきこなり古きをきたる介と云所り
鳴戸法螺介　和方浦の名
螺類　丸きやうなる介　屋ゆまれかへしてあ介乃螺類可
ありのか出かへ勢しハ如し
簪介　二種　百貝圖ニ ちごめの方を羽貝と云

一種ハ蚌類　かし和介の形に似て大介なりたてまみのごとく
節高くたりうすを白く書きうつりあり小き介如り
一種ハ螺類　姫くれる白き介に縦横に節阿りてふりしこれハ
和方浦にし云名に然ども其の方形状簪に よく似たり此方ハ似つりだ
漣介　百貝圖ニ衾貝楯貝庄云
蚌類　白く横長く横に なれどく節高くむらく入落き
介なり中介小介に阿里
千歳介　和方浦の名
螺類　小介にし地うすを黄にて褐色の横節を地あらば光を
ごぎんむらし介　和方浦の名

螺類　みじかく赤く褐色に同じ色にしたるに少し紋を結介にハ非ず

潮吹介　お仙に入　百貝圖にくかの貝とも

蛤類　お仙の中にまとまる介を云又赤介ハ別なり

がうな

螺類　赤きハ古名なり昔より名を呼介に長く下にしてのり

黒く白けたる介なりいやしく面白からぬをのに大和なまま

ひうざいと云ことの是なり

鞭介

蛤類　後お仙に入花介なり白くまじ高く立かぬ也の

赤ころれどしこれを花介と云ハ誤なるべし

千色介　和お浦の名　お仙に入

蛤類　かしれ介を云

玉介　異名に　お仙に入

螺類　俗称ぞべつこ　お お仙に入うのな介に艶つよくなり

もぐ滑なり多き介なりうまきの紀色

やしろ介　異名和おんに云なり　お仙に入

螺類　俗称うづら介　後お仙に入うのせ貝なり

八鬼介　百貝圖云片部貝角片部に云或ハ雲貝と云ものか

螺類　おしげたるやうなる紀貝なりあらくしれ

介なるに地白く黒のかとりなる角なりさゞへの類に下品

山椒介

螺類　大さはんせうのごとしいろも赤く乾山椒のごとし大和
本草にも見へたり豊前國藍濱より出る細川三斎子名を付かゝ
と云り和尚にし云ものハ是に同らざ余其あより来るものを
不持さきやしやなる介なり

鏡介　和尚にしの名　百貝圖にも同名

蛤類　梅の花介の大なるを和尚浦にて鏡介と云

長幸螺　百貝圖ニ香螺長螺よなき貝とも云

螺類　ながれにしなりかしらくちばしのごとくもく縦横筋
にて地うすを白くかし褐色のくりまゝ

磯介　二種

一種ハ無對　本草紀に入俗称よめがさゝ大和本草ニ曰
よめがかさ和尚にし紅皿とも云ものなり

一種ハ螺類　がんがらと俗に云ものなり云和尚にて

かまう介

螺類　もてなる中貝なりい詩ぬうこんのごとくたてに小筋
入たやあるとおき介なり

笹の露　一名亀介是ハ和尚浦の名

異類　白く薄き小介光あり亀のかたちに似たりむかし
和尚にて亀介と云ハ今ハさしの露と云

紅葉介 異名なり 和名仙は入 百貝圖ニ片貝 紅葉貝 馬のくがと云

無對頼 和名仙は入かたし介を云よわがさらの頼なり

そこみぢの葉れとし 閩書云石磷形如箬笠殼上肉下 此介なるへし

伴蠔簾 和名浦の名

蚌頼 後名仙は入あしかいと云

口切介 和名浦の名

螺頼 竹子介のふとれを云和名かしの名之筍介とハ短く別掃也

梭介

貝頼 貝子れ片方より巻返しごとくあしかい角のごと

くはし巻をのを織ひのごとし色ハうまかきいろなり

猿のかしら 和名浦かしの名

蛤頼 本草云魁蛤の小きを云わか介の小きなりさるぼく

とも俗に云なり

雲敷介 和名浦かしの名 百貝圖ニ合貝ト云

螺頼 あらまき巻のごとく黒くたちてゆりふくれる方の

螺頼なり大和本草螺と云ハ是なり

夏桃介 和名かしの名

螺頼 たにしのやうなるうまく黒く或ハうまかれちとゆるく

光ありうまれ貝なり此名紙付ぬ名なり

かや介 和名かしの名

螺類　厚き介なり艶あり地うすく白くかきの斑点あるまて
うつくしき介ありたゞ滑なり
女郎花　和名にて茶碗介と云
蛤類　形も色を狐介に似たる薄し大小を俱州に多し
和名浦にて茶碗介と云ハ大なる俗名也
嵩海贏
螺類　黄小兒のまいまでいに志内鉢の紋をと云ふ色かきを形
編笠介
異類　此きハ和名にて名付しとのなり其形似るによれるを
然ども介の類とも見えぬ石蕪石花の類にて異物なり色黒し

内に松茸のやうなるおさ節立なり其異物也
岩辛螺
螺類　ぶつくと数へきたるいぼ多し色ハ黒しよりぬ介也
櫻珞介　和名にての名
螺類　形状蜀にあらざれバ見しがたしきハうすかきをなり
蘘荷介　百貝圖ニ賀貲貝ト云
異類　こきハ介とも見えぬ魚物のやうなるとのにて又魚物にも
あらぬ志かでの類にこやうが如く乃ごとく色白し蜀にあらざれば
是ぐ也和名の浦より出る二川にもり中の内を去あるひきてうるし
屋形介　百貝圖　富貝ト云

螺類　艶光にてなめらかに中介なり小介になし黒漆にて深ぬが
ごとくなるに又潔白なる大節にてこれらなる介なり稀にあるものなり

網介

異類　色づけしたるものなり色濃紫あみのごとくさしたるに
竹聖浦に出る稀に白きものにて金き介をえんぼ多く破れ
あり大なるかけり拇なり

巻絹

螺類　白く滑なる介に出てなり稀にあり大小ともにあり

蠶介　和分浦の名

貝類　片方よりまた色小介なり白く薄し和分にも竹聖にもあり

絹にみ

貝類　さきはひ介のあり方に出し角ぬきものなりかいこ
さぬつゝぬぐし介同類の種なり

鐙介

蚌類　厚く白さるのあぶとのごとし前分紀に見を横介
と名付入しはわそらくは誤なるべし

烏帽子介　百貝圖に爪貝又烏の爪圧云

蛤類　白れ中貝ゑぶしのごとし竹聖浦に多みをばくしに
名付あるなり

萩の露

螺類　もてゝかく白き地に紫のかたみ所やわきてなめらか
なる小介なりしかるしれ介なり

苔衣

無對類　うすく色うすく黒く如何介の類之

白米

螺類　まさかの小貝は白きを云赤をますか介と云ふ
形もらぎのごとし　閩書曰米螺小粒如米こまるべし

雪雀　百貝八圖ニ傘貝ト云

無對類　雀介より和らかくひくし梅花介に似て雀介の
ごとくまじ何も色潔白なり小介なり

要介

無對類　扇の要福なる介にして色赤黒し小介之稀なる介之

開守

螺類　たてふしのうく高く筋にて白きもてなる介之いとのけに
似て別なり

紅嬰欲寄

無對類　あいぐ介の形にて外和色なり小介之うまく
内も紅色なきども外より薄し竹なるに出海

菜櫛

蚌類　櫻介の形乃やうにてふじ色青黒く多くハ白く

まげてありよりぬ貝なり和歌浦にて是をいかと云

八重梅 和歌にしハ夏の梅と云

蛤類 梅の花介れぬくらげ高れとのを云同類別種之

桂介

無對類 あつく白きにかゝ紅のうつまゆりかたち丸し

雪雀に似てまじ物し

雪家介

蛤類 白く縦横に筋細く立たれ貝に似て別なり

蟬の羽

蟹類 此介ハこのくふさなるべしうすく光 清やあまうく

せみの羽ゑにまさぬくこれ形ハ蜀ぬらでハ通しがたし

茂壺 俗称でんが介

異類 石に付くれ肉なれハ落てもれ

このやうの形

にて頭に穴あり下ハ底のあるも有又なさもれ色和式

ゑにうまし多さ介し

塩風介 百貝圖にかぢ壺まかじ里とも烏帽子貝と云

異類 形ぬぢ清がに似てゑ祿ぎみ色にくたてまじれ

ふやうなるものゑ多くれ矢物なり頭に穴あり

底ハいづきもぬるくれこぐちまと云

松風

蚌類　色白くたて横に細くこまかに筋にて和尚浦にて
薄き介なり
薄雲
蚌類　かし厚し地白くちらくとかし黒き斑点にて
鶯介　百貝圖にハ是を孔雀貝と云
蚌類　子鳥貝の色るまなるを云
巻物介　又九里ん介と云
螺類　稀ぢるごとくの白にて物る介し稀にて底なし
椎の實
螺類　みじかく丸し白きにかきの斑点にて椎乃実の

だとしぶべたに似たり　拳螺類なり
花筐　是神にある八鬼介と同物歟
螺類　角にて形をのなり　小横にしたるに異形なる介なり
たゞあらく白くうすくしたるなり
玉菖
蚌類　たてに淺く筋にて白し中介にて小さい稀なり
巾着介
蛤類　きんちやくのごとし色青黒くいたや介のふうにて方
二ツ合せたるがごとしぬくれたる皃なり
扰介　二種也

螺類 みなし貝の類にて黒くしやあるて斑文なり
一種ハ奇仙の中にあるし蚌類なり

惡鬼介 百貝圖ニ百鬼貝澤貝とも云

螺類 なり多くして小介になし稀なるものゝ色ハ白し頭
黄ハやうにもしく是にもなり多くして刺螺の類なるべし

腰高 百貝圖ニ盲貝と云なり

螺類 うらすに似て筋ありしのゝぬ介なり俗にこしる
がんがうと云下品し

鬼菜螺 百貝圖ニ大狗貝と云なり

螺類 角多くあるに介なり小介に似し下品なり

生蜷 百貝圖ニ玉琲貝とも云

蚌類 大小数種あり小さいもしくなし和尚に小介を世に
合ふにもしるものにて多し其形人多くしれるごとし

是を百十二名其中圏圍の類ハ異名のもの九品
ありしを除去バ百二種なり此中にて得がたし
そのを去て百介の数にこれべし三十六介ハ
此方にしるに此外集外のものを出せ次第なり
追加にしるもしるべし

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

三月三日住吉浦潮干圖

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用

前歌仙介三十六品評

簾介　左一

蚌類　小きものかし大なるハ多し大小色々ハ紀貌吹上乃演を名産とし浜色かき色ゆゑ横に高くふとく筋立竪に黒紀あとめ何りよ紀介之上品　舊本の書ハ今度に云ものにハあらず阿州より出る簾介に似たりたてしなし横もしのこなり

忘介　右一

蛤類　かいぬくそろに筋細くふくゑ赤ぬき介に似たく別之志目ふ紀ハ小横もく横に小筋ゆゑ紋ハ黒かさいろくハ

梅花介　左二

蛤類　白く清やなし横に細く筋立之介ハ梅花乃一辨落るおとし此介小海ぎまとの多し八重梅書雅など

まだるくし此介の大なるを和お浦にし鏡介と云

櫻介　右二

蚌類　此介あに新ぜしおとくあづこ介を櫻介と名付入ふ

恐らくハ誤なるべし櫻介ハ薄く赤き介之舊本の書によりて論ぜ

片介　左三

無對類　これをみぢ貝と云ものなりよわかさらのことにぢ

れいとくなりたるを云是又同類別種なり

石安明　右三

無對類 世にしるごとし本艸にも出たり小きものの稀なり

紫介 左四

蛤類 紫かいは此家仙に入ハ和家にて云ひしかたも見えたるを
右に云裏紫と云介なり後家仙に云紫介はさくら貝と云
そのこと唇にさくらにて地白く紫のかたりを此方介尽るはしてはし
後家仙の方是なるべし本艸に云紫貝ハ又貝子の類にて別物なり

白介 右四

蛤類 此家仙に入ハしこ所介なり後家仙に入る白介ハ
別なりしころ介を後家仙に花介と云ハ惣くへ誤るべし

蛤介 左五

蜆介 右五

右名あ介ハあまりにて世にしるごとし二種ながら雅なり惣
介なれども古家によみ無しが幸になりて家仙の数に入しなべし

濂介 左六

蚌類 いかにもうしてくしなり蟶に似て小しく大なる
これなしくぐるやもし

蟶介 右六

蚌類 世にしるごとし小きものハかし馬刀をまそと刻ぐるハ誤し

花介 左七

蛤類 是ハ櫛介と云そのこと花かいとも云べきこそのなり

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

赤くうすき介なり横に長きを色介と云ふ赤きを横介に
ちゞへ呼人あり同類にて別種にて此の紀には花介と云り

瞿麦介 右七 百貝圖に海菊と云

蛤類 厚くあらくしくにやはしいらくのやうなるものを
色清紅かしかきもの大なるは色あし小さき程色よし
此介はとゝよくやはしき貝に紅介と云へもあり錦介をなぞ
しこと見し人もの後の紀には錦介をなぞしことゝ云りいづ
きり是なるものをしらぬ錦介には又色そなる錦とも云べしなぞしこ
には赤のこゝの見にて按ば此撰に入方なぞしこなるべし後の紀は誤なべし

空背介 左八 百貝圖に甲貝と云又へなぐりと云

螺類 此撰には此べき介を云後の紀には うづら貝を云和の所にて
云ものは又別に二種のいづきる是なるものをしらぬ此撰に入
うけせ介は和の所にては玉介と云又古来の説には まべて
肉のなきをうつせ介と云よし見えたりまづ此の紀に
入ハづ見て介に云ふ見光又は光螺と云ものなり

袖介 右八

螺類 此の紀に入ハ小き介にて背くこゝきのあるのやうなる
をやうのそで貝に又一種和の所にて云ものは別なり螺にして
口の方袖ばとく長く出しを云大なるを俗に稱つる介と云ものに

舩介 左九 百貝圖に猿頭と云

蚌類　此撰に入る舩介と又和尚浦かく云舩介とちがふなり
形状文につくしがたし曷も又見れがたしことのはなれバとけがたし

蜑介　右九

無對類　あまハ昔和尚かくこ浦が爪と云しをのこ今ハ是を和尚
かくもあま介と云厚き貝之地濃黒く白紀斑文をよ紀介なり

浦打介　左十

螺類　是ハ和尚に一つ出しるとて紀るをのなり其まとハ
ちがふ大きく或ハ小くしろよ紀介かし和尚あらくあを白し
黒くようなるなりうらうづのごとく細き節なり

礒介　右十

無對類　あまとよめの皿よめれかさ又ハ蛋にさらなど云俗称を
一種いそ貝と唱るものハ百貝の中に弁がごとし

佐多類　左十一

螺類　世に多くしるごとし小きをのかし爪さるべとて
又一種なり俗にハさゞいと云なり

千種介　右十一　百貝圖ニハ白黒く彩色なり かやうなもをあ

螺類　下ぞのり頭きりたるやうに見ゆり色こく紫とびと云
色れどし小介にてこまきてなし

物あら介　左十二　百貝圖ニ空蟬貝と云

螺類　色白くしやうされしをのハ此やぬけまじ立ぬるハ

悪しき形為ならざるはしかるべし

津介 左十二

螺類 物あら介に似てふしくきえしものなり地白く
褐色 斑文かくのごとし

烏介 左十三

蚌類 形小烏介に同しく色黒し白きに褐色のかすり
あるを小烏と云又なりい絲に見ゆるを烏介と云なり皆
同物にて色のかはりにて名かはれる

雀介 右十三

無對類 石に介を付けり内なきは砂中にあり色うすき

白さも又熱かき色にて紅も二種あり又鑿白にて背ひく
さきものを雪雀と云かたち雀に似たり多くある介なり

都介 左十四

螺類 からに似たりうすきかきの地にこく筋あり少いがくあり

梭尾螺 右十四

螺類 本草に出たり又法螺とも半なり形状世にしる
ごとし小さきものなし

車渠 左十五

蛤類 俗に志やくし貝とて大なるを杓子に用ゆるものなり
ぬるはうすく其ハふりし世上に多くしるごとし

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

おなじて貝とも云又海扇とも云多き介なり文蛤貝と平ハ
大なる誤なり

色介 右十五

蛤類 此撰に入色介の圖しるまがらしなぞしこ介を
色介とも云撰貝の出てなるも色赤きにより色介とも
云あるは此舊本の屬乃やうなる貝ハしらぬわそらく無
半誤りなるべし按になぞしこ介に錦介を當ればこれ
色介ハ丸きあのみでしこ介なるべき歟

破介 左十六

いぼきの介にても破るを云なり此撰ところく古方を求ぬ

かやうのやくさいもなきものを入れたり

疵介 右十六

是も疵あれ貝をもとべく云ども屬にハ螺の類にて出て
なるに疵つきしんの出たる城圖せり

小介 左十七

もとあるこ海のさ介を云り

真藾枋介 右十七

螺類 大なる茱萸のごとし色ありし藾末にて深る
やうなるが也へ名付しとるへ云すべて小介にて大なる
ハ如し白きをしらず介と云後方仙に入る其をもとり介

是とハ大に別なり

浪間拍介 左十八

蛤類 ふたゝ合しハかしぬるハ深さくこハ深しうを黄に光あるまてうすくさきぬく介なり多くあるものなり

或云常にかみまうしハと云ハかさと云貝なりとかきどもかさとハ大に別なり

貽介 右十八 百貝圖ニ八塩貝と云ものに似ると又別に貽貝あり姫貝黒貝とも云

蚌類 こきハいがいとも声ふくと云なり和名ふくと云いがいとは蜀とハ大に遠へ是此蜀による時ハ個州に多し鳥の姫ハ此介を云ふ志かと弁がたし西行の家による時ハ阿こやと云ふ無からぬい貝と云べし寶れあと云ハ中乃真珠を

とりしからと云意なるべしさきども真珠ハ石波明より出ものなり貽介よりハ出まじ此すこたがハし識老に出でぬべし和名ふくと云い貝ハ青ふきうまく横に出さ介なり多く白くさきたげあり

右の六く貝合和名とて世に行るものを伴せ家と蜀ハ別に此おく下書にの貝合せ見るべし

但馬竹野浦真図

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用

後歌仙分三十六種評

前歌仙の撰あしれを難てゝ後雅人せんん撰ひなをせし組なり再ゝ此を評ぶ者ハ後歌仙乃序文に見へたり全書これに附せ見るべし

まさぐ是分 左一　お歌仙に同し

りも稀分 右一　お歌仙に同し

梅の花分 左二　お歌仙に同し

花分 右二

お歌仙にハ櫻分を花がひと云ふ此撰に入ハ志ころ分と云そのなり是を花分と云事うたゝかりし前圖の説ならんか赤くいろある分を云ふべきや

櫻分 左三

蚌類 うすと赤き分なり長てるゝを和歌ゆゑ色分と云みじかく小さ枝樣分と云此當に合せり

南まか分 右三

蚌類 みじかき方の蚌ゆゑ恰にちゞし志ゆ吹分と云りの小くさ向かくくろきかすりあるを和歌ゆゑ云此撰乃圖も是なりお歌仙には螺類の分なり大に未遠せり

いづき頃是なるゆをしらず或説にまきを介ニ種ニて
雑前の色れ演より出るを真とするよし色の演れたの
余未そしかふ不傳

ふしあ介 左四　おに編ぢるがごとし

いろ介 右四

しらに留まるハ舟貝とおかぶ紀に云ふのく赤さ色あるを
このを云なるべし又なでしこ介のやうにも見西和かみ云ハ
撫介の横に出きを色介と云此方是なるべし

ならの介 左五　おかぶ紀に同し

みやこ介 右五　おかぶ紀に同し

うら折介 左六　おかぶ紀に同し

さたべ 右六　おかぶ紀に同し

むらさあ介 左七

此留ハおかぶ紀にちがひさくら介の方なるべしさら介の
事前の百貝れ中に編ぢ

しら介 右七　おかぶ紀に同し

なでしこ介 左八　おかぶ紀に同し

浪るのしハ 右八　おかぶ紀に同し

こさぬるさ介 左九

あまたハ和かみ浦にてさぐ浪と云介なり百介の中に注し傳る

はくら介　右九　百貝圖に塩貝 塩津貝とも

蚌類　大なるは如し小介なり色白くきやなし

一種和尚の浦にくゝ云ものはこゝ介のごとくなる螺の

類なり色黒く同色の斑点阿里

子鳥介　左十

蚌類　かさち鳥のごとし鳥介と同類にて子鳥の方は

白くきにしかさのうへ所なり色こさ介なり

きじ兎介　右十　おこ紀に同し

いさや介　左十一　おこ紀に同し

あこや介　右十一

蚌類　おこ紀に入るものと後に紀に入るものと當れ違せり

此撰に入るは和尚にしきんちやく介と云ものに似いづきり

是なるものを志らばわこや介はい介と云るよしあに

論ぜるがごとし　わこは阿兒と半海士の兒などを云なるべし介の名にはあらぬ

あはび介　左十二　おこ紀に同し

かさし介　右十二　おこ紀に同し

うきせ介　左十三　百貝圖に八代貝と云

螺類　うづら介と云ものなりきじにあとくあらくさち

うづらの生れどくかさ色の斑文ありうきくよし介に

委はおこ紀の中に評は

こなし介　右十三

螺類　上出く下にて清まりたるやうの介なり色あいきこ
あきどこ地白く黄赤さかたのが多し按に十四番雲呂
このなる介をよみしかなるべし後に強て一種の
介の名とせし歟

あさり介　左十四　百貝圖に白貝と云恐らくは誤ならん又高濱貝と云ものこれ歟

蛤類　右に同じく紋ハいふ語くなり
紀君より多く出るもまぐりと同じく答用可用ゆ
右に同じより文いろ〳〵面白さものを大小ぬきに任せてを

志ち介　右十四

蛤類　小介にて大なるハいまだ見ぬ色白く紋ありし稀に
紋ありもあるかし也がこゝろやうなる介ありて多くを

掏あら介　左十五　お安仙に同し

からり介　右十五

お安仙に云ハ介と同掏歟此器ハ口ばかりし介と云
ものに同じ是姫未考

あしかい　左十六

蚌類　和名にて云いよすぐきと云介ありもぐき介の
形に似てもじ也地うも黄にこいかきの芽のやうなる
文なりしやを介なり小きハかし大なハ多くを介ありし

みぢ介　右十六　おかの紀に同し
ほ内ぐり介　左十七　おかの紀に同し
しぐみ介　右十七　おかの紀に同し
小介　左十八　おかの紀に同し
ちくさ介　右十八　おかの紀に同し

以上後欲紀三十六品の評なり　当欲紀合数
尺目に後かの紀の方委し　此撰を用べきものゝ
前かの紀有　九種　後欲紀に九種合十八種別乃
貝あり是ハ名も介を別なり

三十六の内前後とを小同じ名なるもの二十
七種志の種ども同名異物のもの七種中に
何ゆゑ当かの紀介数になせば五十二種ハ二十種ハ
同名同物なり
始の介名数百二小かの紀五十二種入熱斗
百五十四種にて余が見聞の貝画ぬ尓来
尺及そのハ追加に記べし

源氏分配當目録

桐壺　月日分
空蟬　本名　又せみ分とも云
若紫　こゝる分　或はじめ分
紅葉賀　こゝみち分　一名かうし分
葵　本名
花散里　かとゝぎ分
明石　ほまれ分
蓬生　ふぢつが

箒木　ほし分
夕顔　ほゆ分
末摘花　ばに分　一名かでしこ
花裏　しがり様分
榊　たこふき
須磨　しかふき分
漂澪　しらの爪
関屋　しがじま

繪合　しかふき
薄雲　本名
乙女　めくはじや
秋音　うぐひす分
雲　本名
舞火　色分
行幸　山鳥分
椎柱　かうだし分
葵裏葉　こしぶ
葵葉下　甲分

松風　本名
朝顔　本名
玉葛　本名
胡蝶　蝶分
鬘麦　本名　又錦分
聖分　むしろ分
蘭　本名
梅枝　おきやう分
葵葉上　ひめちぶれ
柏木　つぐめ分

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

横笛　たけのこ介
夕霧　牛角介
幻　こさせとる介
竹川　ま貝
橋姫　玉つだれ
総角　ゆ名
宮生木　とり付介
浮舟　舟介
手習　まさき絵介

以上五十四種　此中新組に入るもの七種にて残り四十七種にて百貝の中に評判にて

鈴虫　まりむし介
御法　ま和介
白宮　せささる
紅梅　ぼに舟介
椎本　志ゐれこ介
子蕨　まかり　石蛇之
東屋　くりや介
蜻蛉　とんぼう介
夏浮橋　ぶだう介

新撰六歌仙介

前新組の中まで介あま介の川新介の新ともみえば
おそらくハかなかまじ袖介船介磯介鳥介四種ハ
川新よりくらへ見れ介きど介ハまさ海よりしうら孫だ
ま遠を除川新れ能かなへ見ほ種にせこ介こる介の
二ツ古新河遠ハ合てハ新組の数となれ今左に記

左一　蟬介　讀人不知

夫木集
蟬介の数しときけば村松の嶺くり浪の雪ぬりけり

右一　みる介　讀人不知

夫木集
打よりるこゝ船かひ出てよざの海れ拒びの浦に頃も無ぬべし

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

左二　袖介　西行

浪あらふ衣乃浦の袖がいはしきかひ風のたゝきをくかな

右二　烏介　西行

山家集

波よせるしらくの濱れかくすかい拾ひやしくもおもはるゝ

左三　船介

夫木集

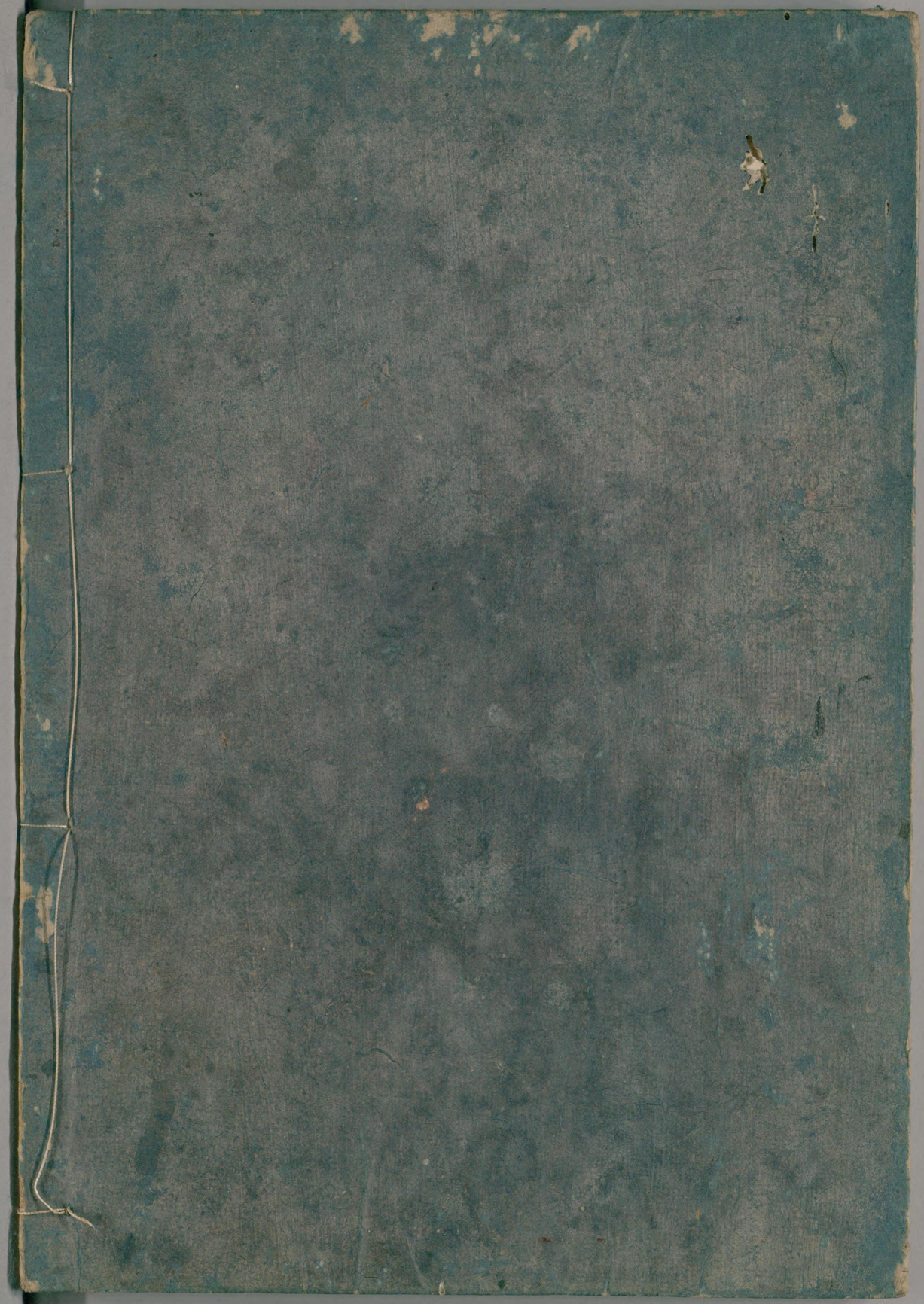
さぐ人もおぎさふよする舟かいハ出る風やはすぐなるん

右三　磯介　人丸

舟庭の玉に浦ぶきるいせがいのかゝ恋のこぞそしハ屋ふつく

貝盡浦之錦上終

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用